

『源氏物語』 匂宮の「心ならひ」

—— 光源氏との対比から ——

はじめに——従来の匂宮研究とその問題点

大君の死を語り終えた総角巻の末尾に、次のような場面がある。

(1) いといたう瘦せ青みて、ほれぼれしきまでもを思ひたれば、
心苦しと見たまひて、まめやかにとぶらひたまふ。…(中略)
…音をのみ泣きて日数経にければ、顔變りのしたるも見苦し
くはあらで、いよいよものきよげになまめいたるを、女なら
ばかならず心移りなむと、おのがけしからぬ御心ならひに思
しよるも、なまうしろめたかりければ、いかで人の譏りも恨
みをもはぶきて、京に移ろはしてむと思す。(総角⑤三三八)

【《河》七・尾・大・鳳・前・《別》保—心ならひ】

ここに描かれているのは、大君を亡くして悲嘆に暮れ、「瘦せ青み」「顔變り」して憔悴したがゆえに美しい薫の姿と、それを見た匂宮の心の動きである。薫の姿を目にした匂宮は、女性が見た

小野 貴裕

ならば必ず薫に心が傾くに違いないと確信し、「おのが」「心ならひ」に基づいて中の君の心を疑い、不安になる。そして、彼女を宇治から京へと移してしまおうと考えるに至る。このような、薫と中の君との関係性を疑う匂宮の心については、従来「嫉妬」や「猜疑」と把握されてきた。

しかし、この場面をはじめとした、薫と中の君との関係性を疑う匂宮の心のあり方を、単に「嫉妬」や「猜疑」といった内容レベルの把握で済ませてしまっただけでよいのだろうか。もちろん物語内容上そのように把握することは可能ではある。だが、より注目しなければならぬのは、匂宮のそうした「嫉妬」なり「猜疑」なりがいかなる表現によって形象されているか、という表現レベルの問題ではないだろうか。これまでの匂宮論においては、匂宮を語る表現そのものへの着目がほとんどなされてこなかった。

そもそも、匂宮という人物は研究史上どのように把握されてき

たか。その研究史を紐解いてみると、そこに現れてくるのは大きく二つの問題系である。まず一つは、続篇における「主人公」の問題、そしてもう一つは、匂宮の好色性をどのように評価するかという問題である。

今簡潔にまとめるならば、以下のようになる。まず「主人公」の問題について、続篇の主人公を煮ではなくむしろ匂宮であると説いたのは手塚昇氏であった。しかし、「主人公」という存在は物語に実体的に存在するとは言えないし、続篇において、匂宮か薫かのいずれか一方を「主人公」と定めるのは甚だ困難と言わざるを得ない。一方で、すでに野村精一氏は、正篇の「主人公」である光源氏の「すき」と「まめ」をそれぞれ分有する存在として匂宮と薫を把握し、両者を、「本立ちのできない衰弱した英雄」と捉えた。

そして、光源氏の「すき」を受け継ぐ「主人公」という把握と関わって論じられてきたのが、匂宮の好色性の問題であった。この好色性については従来様々な評価がなされており、たとえば時枝誠記氏や、匂宮を「平衡感覚の豊かな色好み」と評する森一郎氏のように、匂宮の好色性を肯定的に把握する論がある。それに對して、その好色性を「頹廢的」と把握する武田宗俊氏の論をはじめ、匂宮の好色性を否定的に捉える論も多く出されてきた。一方で、その好色性を、続篇を通じて変容するものと捉えた稲賀敬二氏の論などもある。

このように匂宮は、「主人公」性、好色性への評価の中で揺れ動き把握されてきた。そして、物語内容のレベルから匂宮を取り上

げるこうした一連の研究が、一定の成果を挙げってきたことは事実である。しかし、その一方で置き去りにされてきたこと、それは、匂宮を語る表現、とりわけ、匂宮の心のありようをめぐる表現そのものへの着眼ではなかったか。この問題を追究することは、従来顧みられることのなかった、匂宮の側面を掘り起こすことになるはずである。

そこで本稿において問題にしたいのは、(1)に登場する「心ならひ」という表現である。この表現自体は、例えば『日本国語大辞典』(第三版、小学館)においては「心の習慣」程度に定義されるに過ぎず、一見何の変哲もない表現にも見える。実際『源氏物語』研究においても、この表現は大きく取り上げられてはこなかった。

ここで試みに他作品に目をやると、この表現は『源氏物語』以前の作品には見当たらないことが分かる。また、『源氏物語』以後の平安時代の作品では、『更級日記』に一例、『狭衣物語』に三例見えるにとどまる。一方、『源氏物語』内で「心ならひ」という表現は全三〇例登場する上に、注目されるのは、この表現が匂宮と光源氏に多用され、とりわけ匂宮において問題となる表現であるということである。この点については後述するが、こうした事情を勘案するならば、「心ならひ」という表現は、『源氏物語』において極めて意識的に用いられている特有の表現であると予想される。

こうした状況の中、本稿でこの「心ならひ」という表現に着目することは、従来看過されてきた、匂宮の心の特質の一端を照らし出すことにつながるのではないか。たとえば本表現は、光源氏と匂宮とに共通して用いられる表現としてすでに指摘のある「癖」

という表現とはどのようなように違い、また、匂宮像を捉える上でどのようなに有効たりえるのか。「心ならひ」の検討を通して、好色人か否かというこれまでの把握とはまた異なった、匂宮に特異な内面の一端が浮かび上がってくるはずである。

本稿では、以上のような問題意識から、「心ならひ」への着目をもとに、特に中の君をめぐる匂宮の内面に迫り、従来深められてこなかった匂宮の心の特質の一端を、表現の側面から明らかにすることを目的とする。なお、この「心ならひ」という表現への着目は、匂宮の人物論の一端にとどまらず、統篇世界の特質にも触れる射程を持つことになるはずである。その意味で本稿は、匂宮の心に迫る人物論であるとともに、統篇世界の特質を表現の側面から捉える統篇論でもある。

一、匂宮の「癖」——光源氏との対比

さて、本稿はあくまでも「心ならひ」への着目を上眼とするが、その考察に先立って、「心ならひ」の類似表現とされる「癖」¹⁾という表現について簡単に整理しておきたい。

『源氏物語』において「癖」は全三例ある²⁾。そのうち正篇には二五例登場し、その中の一三例を光源氏が占める。また、統篇には六例と数は少なく、うち四例を匂宮が占める。ここからも分かる通り、「癖」という表現は、正篇においては光源氏、統篇においては匂宮に特徴的な表現と言える。それでは、両者においてこの「癖」はいかなる表現として用いられているのだろうか。

まず、光源氏の「癖」について見ていこう。光源氏の「癖」は、

帚木巻冒頭の「あながちにひき違へ心づくしなることを御心に思しとどむる癖」(帚木①五三―五四)をはじめとして、「世にある人のありさまを、おほかたなるやうにて聞きあつめ、耳とどめたまふ癖」(末摘花①二七八)、「例に違へるわづらはしさに、かならず心かかる御癖」(賢木②九二―九三)などと登場する。これら光源氏の「癖」については、すでに秋山虔氏の論がある。秋山氏は帚木巻の用例について以下のように述べる。

光源氏の「癖」は、…(中略)…「社会人」「生活している人」としての彼の人生内容を増幅し、あるいはより超越的にそれを完成させる契機として立ちはたらくものとなる。彼は昔男、交野の少将らから直系の好色人でありながら、その好色を、「本性」からすれば否定的な「癖」として受けつぎつつ、じつはその「癖」に発動する理不尽な志向行動においてかえって光源氏に固有的というべきその人生を生きることにした。

秋山氏が述べるように、光源氏の「癖」は、光源氏の「行動」を導くものとしてある。実際にこの場面は、光源氏が空蟬や夕顔といったいわゆる「中の品」の女性と関わっていく物語の序章となっている。秋山氏の言葉を借りれば、「彼女らを物語の世界に引き込んでくる」ことが「光源氏の『癖』に起因する」のである。ここでこの「癖」は、そうした以後の物語展開を語り出すためのものとして描き出されていると言えよう。また、後に光源氏が朧月夜や伊勢斎宮、朝顔斎院らとの禁忌の恋に向かう際にも「癖」が描き出

されている。その意味で、女君を「物語の世界に引き込」むという、光源氏の「癖」が持つ性質は、基本的には光源氏の「癖」全体に通底するものと言つてよい。加えて、秋山氏の指摘には無いが、光源氏の「癖」が専ら語り手によって言及される（十三例中九例）ことには注意される。詳細は割愛するが、光源氏と女君らの物語が語り出される上で、「癖」が不可欠な要素として物語中に登場し、物語を推進する機能を有しているとひとまずは言えるだろう。

それでは、匂宮の「癖」についてはどうか。その初出は次の通りである。

中納言も、過ぎにし方の飽かず悲しきこと、そのかみより今日まで思ひの絶えぬよし、をりをりにつけて、あはれにもをかしくも、泣きみ笑ひみとかいふらむやうに聞こえ出でたまふに、まして、さばかり色めかしく、涙もろなる御癖は、人の御上にてさへ、袖もしぼるばかりになりて、かひがひしくぞあひしらひきこえたまふめる。（早蕨⑤三四九）

ここでは、大君を亡くした薫の思いを聞いた匂宮の反応とともに、その涙もろい「癖」が描き出される。

匂宮の「癖」に関しては、高田祐彦氏の指摘がある。高田氏は「癖」について、「宇治十帖には、匂宮の好色に用いた例が目につくが、光源氏の癖より矮小化されており、救いようのないものになっている」と述べる。「救いようのない」ということが具体的にどのような状態を指すかは明らかではない。しかし、先に示した

ように、光源氏に比す限りでは用例数が少ないこと自体は、匂宮の「癖」が物語の後景に退いていることを示しているだろう。そして、その点と関わらせるならば、光源氏とは異なり、匂宮の「癖」は四例中半数の二例が他の人物による言及であることもその証左となる。

このように、光源氏と匂宮の「癖」をそれぞれ比較してみると、匂宮においては、「癖」という表現それ自体のもつ意義が希薄になり、語り手に大きく取り上げられて物語を動かすこともないことが分かる。匂宮の好色性という従来指摘されてきた問題と関わらせるならば、好色性の「衰弱」を、「癖」という表現に着目することから裏付けることもできようか。

以上、「心ならひ」の類似表現としての「癖」について整理してきた。ここまで述べてきたように、「癖」という表現が物語上問題となつているのは、匂宮ではなく光源氏の方である。その意味では、「癖」という表現は光源氏を論じる評価軸として有効なものではあつても、匂宮においては必ずしもそうではない。しかし、本稿で「心ならひ」という表現に着目する時、そこに浮かび上がるのは「癖」とは逆の現象であるとともに、従来論じられてきたような、好色か否かという観点とは全く異なる匂宮の心のありようなのである。

「心ならひ」という表現は、匂宮においていかに問題となつているのか、以下で検討を進めていこう。

二、句宮の「心ならひ」——物語を動かす機能

『源氏物語』全体を見渡してみると、『源氏物語』中、「心ならひ」及び「心のならひ」等、「心」と「ならひ」が近接して用いられている用例（以下、「心ならひ」と統一して呼ぶことにする。）は、全部で二〇例にのぼる。そのうち正篇では一一例、続篇では九例用いられている。主体別の分布を見ると、正篇では光源氏に七例、朱雀帝、夕霧、内大臣、柏木に各一例ずつ使われている。一方、続篇では句宮に六例、薫に二例、浮舟の母・中将の君に一例使われている。

これを見ても明らかのように、「心ならひ」という表現は、正篇における光源氏、そして続篇における句宮にそれぞれ特徴的な表現なのである。この表現は、前節で検討した「癖」とは異なり、とりわけ句宮の心のありようを特徴づける重要な言葉なのではないか。以下、句宮における「心ならひ」という表現の諸相を分析していきたい。

先に述べたように、句宮の「心ならひ」が描かれるのは、本稿冒頭に挙げた(1)の総角巻の場面が最初である。改めて(1)を参照されたい。ここでは語り手が句宮の「心ならひ」に言及する。悲嘆に暮れ憔悴しきったがゆえに、層美しい薫の姿を見た句宮が、「おのがけしからぬ御心ならひ」に従い、このような薫を見れば女性であれば必ず心移すのではないかと考える。ここで句宮は、「おのが」「心」に「ならふ」、すなわち、他ならぬ自分自身の思考回路にそのまま従うことで、中の君のあり得べき行動を想像してい

るのである。

ここで注目しておきたいのは、「心ならひ」がいかなる機能を担って描き出されているのかという点である。この場面では、そのような「心ならひ」が「うしろめたし」という不安な感情を生み出し、中の君をなんとかして自分のもとに置こうという意志を句宮に強めさせるものとして機能しているのである。そして、「近う渡いたてまつるべきことをなむ、たばかり出でたる」（総角⑤：三四〇）と、句宮は中の君を京に移すべく行動に出るわけである。結果、中の君は実際に早蕨巻において宇治から京へと移ることになった。すなわちここでは、「心ならひ」に基づく思考が、今後の物語展開の原動力となっているのである。そして、ここでの「心ならひ」の機能を、先述した句宮の「癖」のあり方と照らし合わせるならば、句宮の物語を動かしていくものは「癖」ではなく、むしろこの「心ならひ」の方であると言うことができるのではなからうか。光源氏の行動の原理の一つに「癖」があるならば、句宮のそれにあたるのが「心ならひ」なのではないか。

無論、以下に挙げるように、句宮の好色性を点描するにとどまり、物語の展開には大きく関わらない「心ならひ」もある。

- (2) 尽きせぬ御物語をえはるけやりたまはで夜もいたう更けぬ。
世に例ありがたかりける仲の睦びを、(句宮)「いで、さりともし、いとさのみはあらざりけむ」と、残りありげに問ひなしたまふぞ、わりなき御心ならひなめるかし。さりながらも、ものに心得たまひて、

(早蕨⑤：三五〇)

【「わりなき」ものに心】↓《別》保―あちきなかりけるものゝころを】

(3) (右近)「まことに、いとあやしき御心の、げにいかでならはせたまひけむ。…」
(浮舟⑥ 一三四)

【「御心の」↓《河》御―御心かまへは／尾・静・前・大・
鳳―御心のかまへは 《別》宮・国―心かまへは】

(2)は、中の君が京へと移る前の、薫と匂宮との対面場面である。語り手により「心ならひ」が言及されている。ここに見える「世に例ありがたかりける仲の睦び」とは、深い関係がありそうに見えるながら、実際には何の其事もなかった薫と大君との関係性のことを指している。ここでは、匂宮が自らの好色心から、本当に薫と大君との間に其事は無かったのかを問うているわけである。また、(3)は、匂宮が浮舟のもとに侵入したことに對する右近の発言であり、匂宮の好色さが批判されている。このように、これらの「心ならひ」の用例は、(1)の用例とは違つて物語を展開させてはいかない。

しかしながら、匂宮の残りの用例は全て語り手によって言及され、その機能も基本的には先の(1)の用例に沿うものとなっている。次の用例は宿木巻における用例である。

(4) まろにうつくしく肥えたりし人の、すこし細やぎたるに、色はいよいよ白くなりて、あてにをかしげなり。かかる御移り

香などのいちじるからぬをりだに、愛敬づきらうたきところなどの、なほ人には多くまさりて思ざるままには、これを兄弟などにはあらぬ人のけ近く言ひ通ひて、事にふれつつ、おのづから声、けはひをも聞き見馴れんは、いかでかただにも思はん、かならずしかおほえぬべきことなるを、とわがいと限なき御心ならひに思し知らるれば、常に心をかけて、しるきさまなる文などやあると、近き御厨子、小唐櫃などやうの物をも、さりげなくて探したまへど、さる物もなし、ただ、いとすくよかに言少なにてなほなほしきなどぞ、わざともなけれど、物にとりませなどしてもあるを、あやし、なほ、いとかうのみはあらじかし、と疑はるるに、いとど今日は安からず思さるる、ことわりなりかし。かの人の気色も、心あらむ女のあはれと思ひぬべきを、などてかは、事の外にはさし放たん、いとよきあはひなれば、かたみにぞ思ひかはすらむかし、と思ひやるぞ、わびしく腹立たしくねたかりける。なほいと安からざりければ、その口もえ出でたまはず。

(宿木⑤ 四二七―四二八)

匂宮不在の折、薫が懐妊中の中の君のもとに忍び入った。その後、中の君に薫の「移り香」が染みついていたことに気付く匂宮は、薫と中の君との情交を疑う。その契機となるのが、匂宮の「わが」御心ならひ」なのである。ここでも「心ならひ」が語り手により言及される。そして、「わが」思考回路にのみ従つて、今度は薫について、中の君に限りなく接近しているに違いないと考え、行動

する句宮が描かれる。句宮はここで、白らの「心ならひ」から中の君の身の回りを詮索し、怪しい手紙があるはずだと疑い、「安からず」思う。その後、薫と中の君とがきつと互いに想い合っているに違いないという確信に至り、「なほいと安から」ぬ状態になるのである。白らの「心ならひ」に起因する不安や焦燥が、句宮の中で増幅していく過程が詳細に描かれていることが分かるだろう。

そして、結果として句宮は中の君のもととどまり続け、そのことは薫に「かく、宮の籠りおはするを聞くにも、心やましくおぼゆれど」(宿木⑤四三八)と思わせる。(4)の場面で、句宮は、白らの「心ならひ」から薫と中の君との関係性を疑って一層中の君に執着したわけだが、薫はそれを、中の君に対する句宮の愛情の深まりと誤解して「心やましく」思っているのである。その後薫は、一旦は単なる後見としての自己のあり方を再認識して中の君への執心を抑える(宿木⑤四三八)ものの、そこにとどまることができなない。むしろ、かえって中の君に対する薫の強い想いが増幅され、物語が動いていくのである(宿木⑤四四三)。つまりここには、「わが」「心ならひ」に従う句宮の行動が発端となって薫の誤解が引き起こされ、物語が動いていくという構図が見えるのだ。

なお、(4)には「ことわりなりかし」という語り手の評語が差し挟まれており、「心ならひ」から生じる句宮の疑心が、生じて然るべきものとして同情的に語り出されてはいる。だが、より注目されるのは、「心ならひ」による疑心が、こうして語り手に寄り添われながらもそれを飛び越え、語り手の同情の域を脱するまでに増幅していくことである。以下にその様子を追っていきこう。

中の君のもとに、薫から紅葉とともに文が届いた。それを目にした句宮の反応は、『をかしき鳥かな』と、ただならぬのたまひで、召し寄せて見たまふ』(宿木⑤四六三)というものであった。「ただならず」と、薫と中の君との関係をますます疑っていく句宮の様子が見て取れる。そして、薫からの文に答える中の君を見た句宮の「心ならひ」は次のように描かれている。

(5)かく憎き気色もなき御睦びなめりと見たまひながら、わが御心ならひに、ただならじと思すが安からぬなるべし。

(宿木⑤四六四)
【《河》大「心ならひ」】

ここでも、語り手が「心ならひ」に言及した上で、「ただならず」と思う句宮の心が描かれる。句宮は、薫と中の君との付き合いは何の疾しさもない付き合いなのだろうと考え、一応は納得しようとする。しかし、句宮の心はそこにはとどまらない。他ならぬ「わが」「心ならひ」が、薫と中の君との関係をそう意味づけることを許さないのである。句宮はさらにその後、両者の関係に疑いを膨らませ続けていく。

扇を紛らはしておはする心の中も、らうたく推しはからるれど、かかるにこそ人もえ思ひ放たざらめと疑はしき方ただならで恨めしきなめり。

(宿木⑤四六六)

「……すべて、女は、やはらかに心うつくしきなんよきことこそ、その中納言も定むめりしか。かの君に、はた、かくもつつみたまはじ。こよなき御仲なめれば」など、まめやかに恨みられてぞ、うち嘆きてすこし調べたまふ。(宿木⑤四六七)

このように、匂宮は薫と中の君との関係を「ただならず」疑い、皮肉らしく恨みかけるのである。そして、その匂宮の「心ならひ」は、中の君が男児を出産した後も続いていく。

(6) 匂宮「何ぞの車ぞ。暗きほどに急ぎ出づるは」と目とどめさせたまふ。かやうにてぞ、忍びたる所には出づるかしと、御心ならひに思しよるもむくつけし。(東屋⑥五七一五八)

中の君のもとに、浮舟の母である中将の君の車がやってきた。この場面は、匂宮がそれを薫の車ではないかと疑う場面である。ここで匂宮は、自分であれば懸想する女君のもとへこのように出向くだろうと想像し、そこから薫の行動について「心ならひ」による推測をしているのである。ここでも語り手が「心ならひ」に言及している。そして、匂宮の「心ならひ」による思考は、語り手によって「むくつけし」と評される。(4)の場面で「ことわりなり」と同情の姿勢を示した語り手だったが、ここでは、「心ならひ」による思考が語り手の同情を超えるまでに増幅した様が描かれているのである。こうして気味が悪いとされるまでに増幅した匂宮の懷疑は、もはや抑えることができず、なお次のように疑う匂宮が

描かれるのである。

宮入りたまひて、「常陸殿といふ人や、ここに通はしたまふ。心ある朝ぼらけに急ぎ出でつる車副などこそ、ことさらめきて見えつれ」など、なほ思し疑ひてのたまふ。(東屋⑥五八)

以上の検討から指摘できることは、匂宮の「心ならひ」に基づく疑心が、薫と中の君との物語を通じて増幅し続け、物語を展開させていくものであるということである。また、匂宮は、その都度自身の「心ならひ」に従って中の君の内面の動きを推測したり、薫の行動を想像したりし、両者の関係性を疑う。だが、実際薫と中の君との間には、匂宮が気にかけているような実事は無かった。つまり、その「心ならひ」に基づく匂宮の思考は、物語の次元では、薫と中の君それぞれ別の行動や内面、両者の関係性を捉え損ねているのだ。しかし、そのことを匂宮自身が自覚することはなく、匂宮の錯誤に基づく推測や不安は、自身の中で増幅していくだけなのである。ここに描かれているのは、匂宮と周囲との徹底的な断絶の反復である。このように、匂宮の「心ならひ」は、自身を取り巻く現実を捉え損ね、それを繰り返すという匂宮の物語の原動力として機能しているのである。

一方、光源氏の「心ならひ」はどうだろうか。光源氏の場合、ここまで見てきたような機能を持つ「心ならひ」はまず見られない。光源氏の「心ならひ」には、例えば次のようなものがある。

(A) 光源氏「かかる草隠れに過ぐしたまひける年月のあはれもおろかならず、また変らぬ心ならひ」に、人の御心の中もたどり知らずながら、分け入りはべりつる露けさなどをいかが思す。…(中略)…など、さしも思されぬことも、情々しう聞こえなしたまふことどもあめり。(蓬生②三五〇)

【青】神—心のならひ—「見せ消ち」

(B) 辰巳の方の廂に据ゑたてまつりて、御障子のしりは固めたれば、(光源氏)「いと若やかなる心地もするかな。年月の積もりをも、まぎれなく数へらるる心ならひ」に、かくおぼめかしきは、いみじうつらくこそ」と恨みきこえたまふ。

(若菜上④八〇—八一)

【青】御—「つもり」見せ消ち、「心ならひ」書き入れ

(C) ありつる箱も、まどひ隠さむもさまあしければ、さておはするを、(光源氏)「なぞの箱ぞ。深き心あらむ。懸想人の長歌詠みて封じこめたる心地こそすれ」とのたまへば、(明石の君)「あなうたてや。いまめかしくなり返らせたまふめる御心ならひに、聞き知らぬやうなる御すさび言どもこそ時々出で来れ」とて、ほほ笑みたまへれど、ものあはれなりける御気色どもしるければ、(若菜上④一二五—一二六)

光源氏の場合、(A)のように、「心ならひ」が会話の中で用いられ、それが語り手に挿擧される用例がある。ここでは、光源氏が

末摘花に対して、自らの変らぬ「心ならひ」であなたのもとを訪れたのだと語っている。このような光源氏のあり方を、語り手は、思ってもいないことをいかにも情深く「聞こえなす」と挿擧している。「心ならひ」を方便として用いた用例と言えよう。また、(B)の朧月夜との会話の中で用いられる「心ならひ」は、朧月夜に自らの思いを訴えるきっかけとして恋の場面の常套句のように用いられているにとどまる。あるいは、(C)の明石の君の発言の中で使われる用例を見ても、光源氏の「心ならひ」が、冗談めかした会話の中で用いられていることが分かる。ここでは明石の君が、女三宮を迎えて「いまめかしくなり返」った光源氏の「心ならひ」を茶化しているのである。「ほほ笑みたまへれど」と逆接でつながっていき、この場面全体が明るい笑いに包まれているわけではないものの、「心ならひ」が相手を茶化す文脈で用いられていることに注意したい。

このように、光源氏の「心ならひ」は専ら会話文中で用いられている(七例中五例)。このことは、六例中五例(③を除く)とすれば、全てが語り手によるものとなる。と、専ら地の文で用いられる句宮の「心ならひ」とは非常に対照的である。また、句宮とは違い、光源氏の場合、「心ならひ」が物語の進展に関わることはほとんどなく、物語上句宮ほどの重さをもって機能することはない。

以上、句宮の「心ならひ」を検討してきた。続篇では、物語の展開に大きく(それも句宮にとって非生産的に)関わる句宮の「心ならひ」が見出される。これは、光源氏のそれとは著しく異なっている。そして何より、句宮の「心ならひ」のほとんどが語り手

によって言及されることは重要である。このことから、発話の中で用いられるのがほとんどである光源氏の「心ならひ」とは違ひ、匂宮の「心ならひ」が彼の心のあり方を示すものとしてクロウズアップされ、物語上に描き出されているということを指摘できるのではないだろうか。専ら語り手によって言及される光源氏の「癖」と、同じように語り手に言及される「心ならひ」とは、ちょうど対応しているかのようである。そして、匂宮はその「心ならひ」を繰り返して、中の君に執着していった。次節ではこれまでの検討を踏まえ、中の君をめぐる匂宮の心のありよう、さらには、「心ならひ」という表現の意義を捉えたい。

三、「心ならひ」という表現の意義——続篇論への射程

ここまで見てきたように、匂宮は光源氏的な「癖」を持つ存在としては描き出されていない。むしろ、その「心ならひ」こそが、匂宮と中の君との物語を動かしていったのであった。そして、それは、白らのものである中の君に危機が訪れたと匂宮自身が判断し、中の君と薫との関係に疑いを持ったときに発動するものである。つまり、匂宮における「心ならひ」とは、匂宮の中の君への執着と密接に関わるものであると言えよう。

中の君に対する匂宮の執着について、鈴木泰恵氏は、「香り」という観点から考察を加えている。鈴木氏によれば、匂宮の香りが薫の天性の香りに対して「似非」に過ぎず、その「負性」が匂宮の中に「コンプレックス」として内面化^②されているとの前提のもと、そのような「負性を意識するからこそ、それをはねかえすべ

く、つまり薫には渡すまいと、匂宮は中の君を重く扱い、中の君物語を形成していく」のだという。そして、匂宮にとつての中の君は、「薫の影に怯えながら執心する」女君であると指摘している。この指摘に従うならば、中の君を薫に奪われるということとは、匂宮にとつては、自己の存在が揺らぐことを意味するのではないか。中の君は、匂宮が匂宮たることを保証する女君なのであり、それゆえに、匂宮は中の君と薫との関係を疑い続け、中の君に執着していくのである。

そして、本稿における問題は、そうした匂宮の「嫉妬」なり「猜疑」なりが、他でもない「心ならひ」という語で形象されていることであった。ここから浮かび上がってくる匂宮とは、どのような内面をもつ人間なのだろうか。

前節の「心ならひ」の検討を踏まえると、次のように言えよう。すなわち、匂宮は、自己の価値観を薫や中の君の中にも存在するに違いないと当てはめ、それに沿って思考を展開して両者の関係性を疑っていく、「わが」「心」に「ならふ」人物なのである。このことが示すのは、「嫉妬」や「猜疑」以上に、自己の価値観や論理、自己の心の動きというものに極めて強く「呪縛」される匂宮の特異な心のあり方ではないか。そして匂宮は、他ならぬ白らの心へ「呪縛」されるあまり、自身の心の動きを他者に投影してしまい、薫も中の君もともに自分と同じような心を持つているかもしれぬという恐怖を覚えるのであった。このように、他ならぬ自分自身の価値観に雁字搦めになるという匂宮の心のあり方を描き出すのが、匂宮における「心ならひ」という表現ではないか。

こうしたあり方を句宮の人物像そのものとして敷衍することに
は慎重でなければならぬが、とりわけ中の君との関係に関する
限り、そこで焦点化されているのは、自身の心に縛られるこうし
た句宮のあり方なのである。従来注目されてこなかった「心なら
ひ」という表現は、句宮の内面の一端を形象する表現として、極
めて句宮に特徴的であると言えよう。「癖」が、様々な女君を求め
続けていく光源氏のありようを象徴し、光源氏において問題とな
る表現であったとすれば、「心ならひ」とは、光源氏と共通して用
いられながらも、句宮において問題となる表現なのであった。そ
してそれは、自己の価値観や思考回路に閉じ籠り、他者に自己を
投影してそれに怯えつつ、ただひとりの中の君に対して激しく執
着していく句宮固有の心の動きを特徴づける重要な表現だったの
である。

また、先述したように、この「心ならひ」への着目は句宮の人物
論にとどまるものではないだろう。ここまで見てきたように、句
宮―中の君―薫という三者関係において、その関係の状況的变化
が句宮の「心ならひ」を軸にしていることは見逃せない。「心なら
ひ」、すなわち自己の価値観に強固に「呪縛」されることによつて、
句宮は自己の思考回路にのみ閉じ籠り、周囲の人々を誤解し、時
に句宮も誤解され、周囲との断絶を深めていく。そして、その断
絶が原動力となつて物語が展開していく構図がここには描かれてい
るのである。つまり、「心ならひ」という表現は、三谷邦明氏が指
摘する、誤解や齟齬が物語を動かしていくという統篇世界のありよ
うを表現のレベルで示すものでもあるのだ。そのような意味で、こ

の表現は、統篇世界の特質の一端にも触れ得る表現なのである。

さらに言えば、本稿を通じて見えてきたことは、句宮と光源氏
とが「心ならひ」という表現を媒介に繋がり、互いが互いを照ら
し合う存在として描かれていることである。このことは、『源氏物
語』統篇を語るスタンスの問題を改めて認識させはしまいか。

例えば神田龍身氏は、正篇を「全面否定」し、世界原理の上で
正篇とは「断絶」した世界として統篇を把握した。だが、本稿の
中で浮かび上がったのは、正篇における光源氏の「心ならひ」
という表現を意識し、句宮の物語を語っていくとする統篇の表
現のあり方である。句宮は、光源氏を語る表現に対する強い自覚
のもとで造型されているのではないか。無論、本稿で論じてきた
ように、「心ならひ」という表現一つをとつても、句宮と光源氏と
でその用いられ方は様々なレベルで異なっている。しかし重要
なのは、それが異なっているように同じであろうと、正篇の表現を
受け止め、その表現でさらなる物語を描き出そうとしている統篇
のあり方ではないだろうか。世界観の上で「断絶」しているか
らといって統篇を正篇から切り離しては見出し得ない両篇の連な
りを、「心ならひ」のような、表現それ自体は物語っているのであ
る。

統篇は正篇と「断絶」しているのか否か。そのことは、物語世
界を支え動かす表現そのものに着目し、『源氏物語』を読み解く中
で追究していかねばならない課題なのではないだろうか。

おわりに——句宮における「心ならひ」の消滅

本稿では、「心ならひ」という表現に着目し、句宮の心のありようを考察してきた。そのことから明らかにになったように、続篇における句宮は、光源氏のな好色性からは程遠い。むしろそうした把握とは全く別に、句宮は中の君に執着し、自らの「心ならひ」に強く〈呪縛〉される人間として描かれていた。その中で、そのことから生じる句宮と周囲の人物との隔絶や齟齬が、中の君をめぐる物語を展開させる力学にもなっていたのである。

しかし繰り返すが、こうした心のありようを直ちに句宮全体に敷衍することは憚られる。今後、本稿で考察した心のありようを踏まえ、句宮を語る表現を分析・考察していく必要がある。特に、浮舟との関わりにおける句宮を、「なやみ」「大殿ごもる」といった身体の自閉性の観点から論じた石坂晶子^註氏の論と、本論での、自己の回路に縛られる句宮の心のありようとの接続は興味深い課題である。また、浮舟との物語において「心ならひ」が描かれなくなるこの意味をより分析的に把握していかねばならないだろうし、それに代わって頻出する「本性」という表現の問題をいかに検討していくかなど、句宮をめぐる表現上の課題は多い。止篇との関わりも視野に入れつつ、後考を期したい。

〈付記〉

本稿は、二〇一二年一月に提出した修士学位论文『源氏物語』の研究のうち、「第二章 呪縛する「心」——句宮の「心ならひ」

ひ」をめぐる」をもとに修正を施したものである。ご教示を賜った方々に心より御礼申し上げます。

注

- (1) 『源氏物語』本文の引用は『新編日本古典文学全集』（小学館）に拠る。引用に際して括弧内に巻名・巻数・頁数を記した。引用本文中の傍線等は論者による。なお、「心ならひ」について異なる場合は、「□」内に、池田龜鑑『源氏物語大成』（中央公論社）をもとに異同を示した。
- (2) 鷲山茂雄「薫と中の君——密通回避をめぐる——」（鷲山茂雄『源氏物語主題論』へ塘書房、一九八五年二月）
- (3) 池田和臣「浮舟登場の方法をめぐる——『源氏物語』の「源氏」取り——」（池田和臣『源氏物語 表現構造と水脈』へ武蔵野書院、二〇〇一年四月）初出は、『国語と国文学』（第五四巻第一号、一九七七年二月）。
- (4) 手塚昇「源氏物語後半の主人公は薫大将ではない」（手塚昇『源氏物語の再検討』へ風間書房、一九六六年一月）初出は、『藤女子大学文学部紀要』（第一号、一九六二年三月）。
- (5) 野村精一「源氏物語の問題——宇治十帖の人間像（一）——」（『国語と国文学』へ第三六巻第四号、一九五九年四月）また、大朝雄二「句宮論のための覚え書き」（源氏物語探究会編『源氏物語の探究 第二輯』へ風間書房、一九七六年五月）も、句宮と薫を物語の「二極の焦点」として把握している。
- (6) 時枝誠記「文章における推敲・改稿・別稿」（日本文学研究

資料刊行会『日本文学研究資料叢書 源氏物語Ⅲ』(有精堂、一九七二年一〇月) 初出は、時枝誠記『文章研究序説』(山田書院、一九六五年五月)。

(7) 森一郎「宇治の大君と中君」(森一郎『源氏物語作中人物論』(笠間書院、一九七九年一二月)) 初出は、『平安文学研究』(第五五号、一九七六年六月)。

(8) 武田宗俊「匂宮」(『日本文学』(第五卷第九号、一九五六年九月)) なお、匂宮の好色性を否定的に捉える論としては、仲田庸幸「恋愛と伝道——薰と匂宮」(源氏物語探究会編『源氏物語の探究 第九輯』(風間書房、一九八四年四月))、甲斐陸朗「源氏物語の人物把握の方法——匂宮の人間像を中心に——」(室伏信助監修・上原作和編『人物で読む源氏物語 第十八巻 匂宮・八宮』(勉誠出版、二〇〇六年一月) 初出は、『中古文学』(第七号、一九七二年三月)) などがある。近年においても、山上義実「匂宮試論——色好みの魅力と限界——」(室伏信助監修・上原作和編『人物で読む源氏物語 第十八巻 匂宮・八宮』(勉誠出版、二〇〇六年一月)) が、匂宮の役割を、「旧態依然とした色好みの不毛性」を描き出すことであるとした。

(9) 稲賀敬二「匂宮——『源氏物語』の人物造型」(稲賀敬二著・妹尾好信編『源氏物語』とその享受資料 稲賀敬二コレクション3』(笠間書院、二〇〇七年七月)) 初出は、『国文学 解釈と鑑賞』(第三六巻第五号、一九七一年五月)。また、榎本正純「匂宮と中の君」(秋山虔・木村正中・清水好子編

『講座源氏物語の世界 第八集』(有斐閣、一九八三年六月)) も、「種姫物語」における「あだ人」からは程遠い匂宮像を読み取る点、後の変容を想定している。

(10) 宮島達夫編『古典対照語い表』(笠間書院、一九七一年九月) に拠る。

(11) 以下に『更級日記』の用例を挙げる。本文の引用は『新編 日本古典文学全集』(小学館) に拠る。

花見に行くとき君を見るかな

といはせれば、かかるほどのことは、いらへぬも便なしなどあれば、

千ぐさなる心ならひに秋の野の

とばかりいはせて行き過ぎぬ。

(三一七)

(12) 以下に『狭衣物語』の用例を挙げる。本文の引用は『新編 日本古典文学全集』(小学館) に拠る。

・狭衣「あさましきことをも仰せらるるかな。御心なら

ひにやさぶらふらん」とて、笑ひたまへど、

(巻一〇七三七四)

・東宮「心ならひはげにさもやあらん。隔てある妹背を待たらねば」と言いたはぶれさせたまひて、

(巻一〇七四)

・狭衣「幼き人は必ずほどあるかは。御心ならひに、うとうとしくもてなさせたまふなめりな。いかなるも、

幼きはゆかしくはべるを。見せさせたまへ」と聞こえ
たまへば、
(巻②・一七)

挙げる。

(13) 高田祐彦「くせ」(秋山虔編『王朝語辞典』(東京大学出版会、二〇〇〇年三月))

(D) 朱雀院 わかれ路に添へし小櫛をかごとにてはるけき仲
と神やいさめし

(14) 「癖」と「心ならひ」が類似表現であるとの指摘は、寺澤佐世『源氏物語』の人物設定——「本性」と「癖」とを中心として——
『国文学論叢』第三四輯、一九八九年三月)を参照されたい。
ただし、寺澤氏の論において、「心ならひ」と匂宮の人物造型との関連性が具体的に追求されてはいない。

(15) 池田亀鑑『源氏物語大成』(中央公論社)に拠る。以下同じ。

(16) 残る一例については、玉鬘、近江の君に一例ずつ、頭中将、夕霧、紫の上、末摘花に一例ずつあり、その他限定できないものが四例ある。

大臣これを御覧じつけて、思しめぐらすに、いとかた
じけなくいとほしくて、わが御心のならひあやにな
る身をつみて、…(中略)…かかる違ひ日のあるをいかに
思すらむ、御位を去り、もの静かにて世を恨めしと
や思すらむなど、我になりて心動くべきふしかな、と
思しつづけたまふに、いとほしく、
(絵合②・一七〇)

(17) 残る二例については、姫君ら(大君・中の君)に一例、薫に一例のみである。

(E) 上の御方には、御簾の前にだに、もの近うもてなし

(18) 秋山虔「好色人と生活者——光源氏の「癖」」(秋山虔『王朝の文学空間』(東京大学出版会、一九八四年三月)) 初出は、『国文学』(第一七巻第一五号、一九七三年三月)。

(少女③六二)
【別】保—心ならひ【

(19) 前掲注13、高山氏論文。

(20) なお、本用例は、「どのようにこのような不可思議な心を習得したのか」ということを訝しがるという内容である。「心ならひ」という名詞的な表現とはやや意味合いが異なっており、参考に挙げるにとどめた。

(21) 以下に、光源氏の「心ならひ」を語り手が言及する二例を

ここで語り手により言及される光源氏の「心ならひ」もまた物語を動かす機能を持たない。さらに言えば、ここには、匂宮における現状を「捉え損ねる」「心ならひ」の用例とは異なり、はからずも現状を捉え得ている光源氏の「心ならひ」が描かれていよう。まず(D)は、冷泉帝入内が決まった前斎宮に対する朱雀院の嘆きや恨みを捉えた「心ならひ」

である。また(B)も、行幸巻以降の夕霧の紫の上思慕をはからずも言い当てる「心ならひ」という形にはなっていない。このような、「心ならひ」についての、正篇／続篇における「捉える」／「捉え損ねる」というあり方や、それをつなぐいわば過渡的な用例については、匂宮と光源氏以外の用例をも取り上げつつ検討する必要がある。例えば正篇の「捉える」用例の典型として藤袴巻(藤袴③三・七)の内大臣の用例は注目されようし、また、東屋巻の中將の君の用例(東屋⑥七五)は、続篇の「捉え損ねる」特徴をよく示している。あるいは、若菜下巻の柏木の用例(若菜下④三・三九)は、語り手に言及され、かつ女君との恋について、男君が自らの思考回路に従い他の男君の内面を推測する用例である点、続篇への過渡的な用例とも言えよう。これらの「心ならひ」の用例が、『源氏物語』の世界観といかに関わっているかという問題は今後検討していく必要がある。

(22) 鈴木泰恵「匂宮——負性の内面化とヒーロー喪失——」(室伏信助監修・上原作和編『人物で読む源氏物語 第十八巻 匂宮・八宮』(勉誠出版、二〇〇六年二月) 初出は、今井卓爾・鬼束隆昭・後藤祥子・中野幸一編『源氏物語講座 第三巻 物語を織りなす人々』(勉誠社、一九九二年九月)。

(23) なお、高田氏(前掲注13)の言葉を借りるならば、ここに光源氏に比して「救いようのない」、「矮小化」した匂宮像を読み取ることは容易い。しかし、そのように匂宮の人物像を早急に意味づけるよりもまず追究していかねばならない

のは、そうした匂宮が今後続篇の物語、特に浮舟との物語を紡いでいく中でどのように描き出されていくかということであろう。例えば、後に触れるように、浮舟との物語の中で「心ならひ」が登場せずに匂宮が描かれることは、匂宮においていかなる意義を持つのか。本稿で論じる余裕はないが、検討されるべき問題だろう。

(24) 三谷邦明「源氏物語第三部の方法——中心の喪失あるいは不在の物語——」(三谷邦明『物語文学の方法Ⅱ』(有精堂、一九八九年六月) 初出は、『文学』(第五〇巻第八号、一九八二年八月)。

(25) 神田龍身「薫／匂宮——差異への欲望」、光源氏の物語から宇治十帖へ(神田龍身『源氏物語Ⅱ 性の迷宮へ』(講談社選書メチエ、二〇〇一年七月)。

(26) 石阪晶子「なやみ」とぶらぶ薫(石阪晶子『源氏物語における思惟と身体』(翰林書房、二〇〇四年三月)。

(東北大学大学院文学研究科前期課程在籍)